月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.154



ミュゼがクリスマス衣装を披露！

『英雄伝説 暁の軌跡』

最新シリーズがNintendo Switchでも楽しめる！

『英雄伝説 黎の軌跡 for Nintendo Switch』

ファルコムニュース

英雄伝説 空の軌跡 リベール王国スナップショット

ザナドゥに海賊姫が襲来！
大迫力の奪還戦が勃発？

も～っと集まれ！ ファルコム学園



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

2 **目次**

4 最新シリーズ第1作が
Nintendo Switchに登場！
『英雄伝説 黎の軌跡
for Nintendo Switch』

8 **も～っと集まれ！ ファルコム学園**
新久保だいすけ

18 **ファルコムニュース**

22 ミュゼがクリスマスにピッタリな衣装を披露！
『英雄伝説 暁の軌跡』

26 リベール王国を名物記者コンビと巡る
英雄伝説 空の軌跡
リベール王国スナップショット
著：はせがわみやび　イラスト：西野幸治

『軌跡』最新シリーズ第1作『英雄伝説 黎の軌跡』のNintendo Switch 版が発売決定！



英雄伝説 黎の軌跡
for Nintendo Switch

発売日：2024 年 2 月 15 日
ジャンル：ストーリー RPG
対応機種：Nintendo Switch™
CERO：C　**プレイ人数**：1 人
価格：【パッケージ版】5,400 円（税抜）
【ダウンロード版】5,400 円（税抜）

『英雄伝説 黎の軌跡 for Nintendo Switch 』公式サイト
https://www.falcom.co.jp/kuro/switch/

ゼムリア大陸でエレボニア帝国と対をなす超大国「カルバード共和国」を舞台とした『軌跡』最新シリーズ『英雄伝説 黎の軌跡』。その第 1 作が 2024 年 2 月に Nintendo Switch にて発売することが決定！　各種機能や操作周りが Nintendo Switch に最適化されているほか、ゲームをより快適に、楽しく遊ぶことができる「ハイスピードモード」、「アーカイブ」機能が標準搭載。さらに、主人公のヴァンや、アニエス、フェリ、アーロンといったキャラクターたちのオリジナル衣装カラー「4spg UNITED 」や、水着、ホロウコアボイス、戦術オーブメントカバー、アタッチアイテムなど、魅力たっぷりな追加コンテンツも収録された豪華仕様になっているので、Nintendo Switch で遊びたいと思っていた人はぜひチェックしてみよう。

2024年2月14日までの予約でダウンロード版がお得なセールを開催！



2024 年 2 月 14 日までに予約すると、10% オフで購入することができる特別なキャンペーンを開催！ダウンロード版で楽しみたい人は、早めの予約がおススメ！

パッケージ版初回特典は『黎の軌跡』のベスト版音楽アルバム「Best Sound Collection -KURO NO KISEKI-」！



「Best Sound Collection -KURO NO KISEKI-」は、「英雄伝説 黎の軌跡 オリジナルサウンドトラック」、アレンジアルバム「黎の軌跡 SUPER ULTIMATE」から人気曲を厳選収録した珠玉の 1 枚！　新規パッケージが採用されているので、また新鮮な気持ちで音楽を堪能できること間違いなし！

CHARACTER

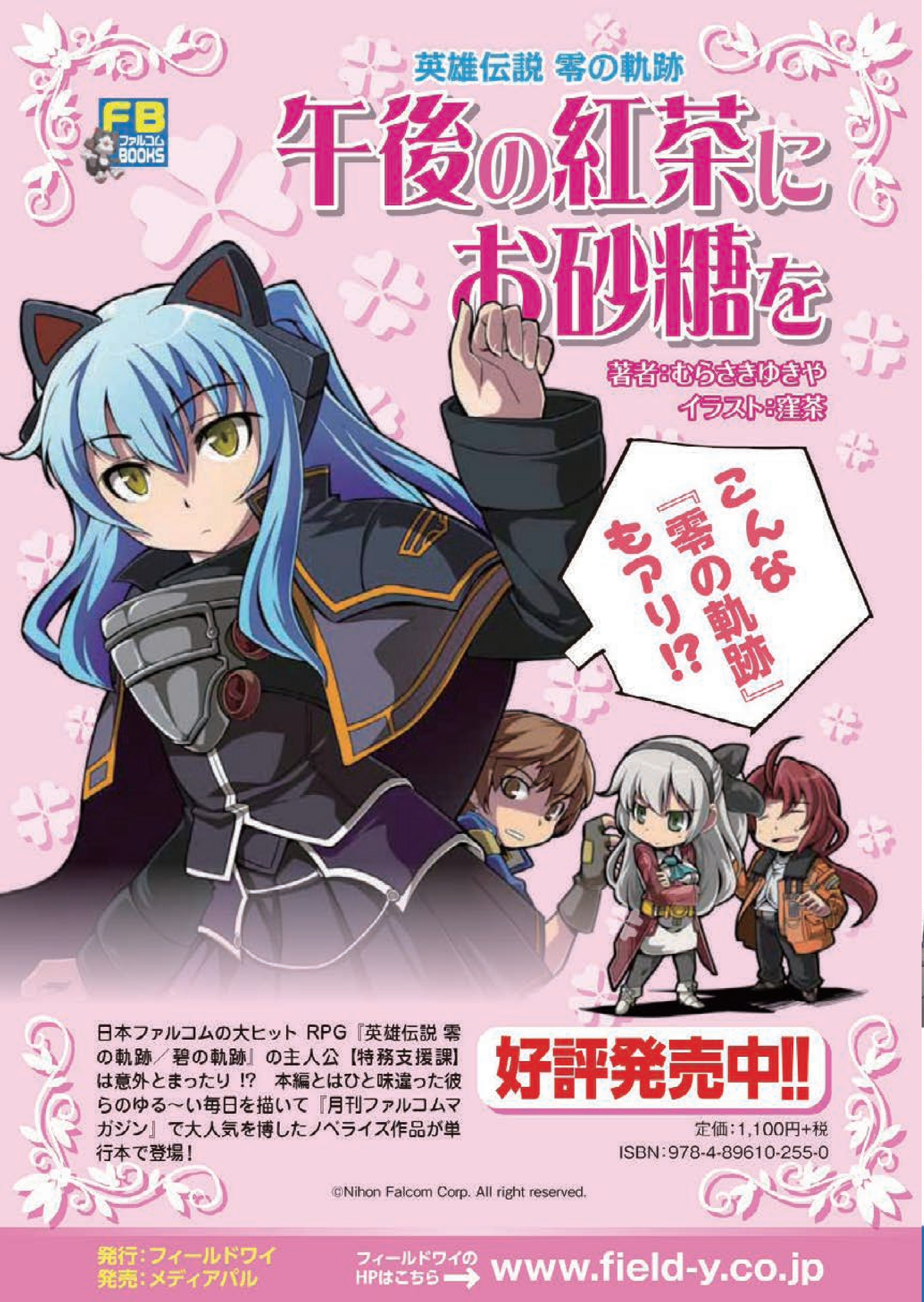


ヴァン・アークライド（CV：小野大輔）
Van Arkride

アニエス・クローデル（CV：伊藤美来）
Agnès Claudel

フェリ・アルファイド（CV：小倉唯）
Feri Al-Fayed

アーロン・ウェイ（CV：内田雄馬）
Aaron Wei



英雄伝説 零の軌跡
ファルコムBOOKS
午後の紅茶にお砂糖を
著者:むらさきゆきや
イラスト:窪茶
こんな『零の軌跡』もアリ!?
日本ファルコムの大ヒット RPG『英雄伝説 零の軌跡／碧の軌跡』の主人公【特務支援課】は意外とまったり !? 本編とはひと味違った彼らのゆる～い毎日を描いて『月刊ファルコムマガジン』で大人気を博したノベライズ作品が単行本で登場！
好評発売中!!
定価:1,100円+税
ISBN:978-4-89610-255-0
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
発行:フィールドワイ
発売:メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp



ファルコムBOOKS
英雄伝説 零の軌跡
四つの運命
著者:田沢大典 イラスト:松竜
特務支援課はここから始まった!!
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
日本ファルコムの大ヒットRPG『英雄伝説 零の軌跡』から、ロイドたち特務支援課の過去エピソードを描いたオフィシャルノベライズ。ゲーム本編では語られなかった名シーンの裏側やキャラクターそれぞれの心情が今、明らかになる！
原作:日本ファルコム
(『英雄伝説 空の軌跡』)
価格:1,155円(税込)
ISBN:978-489610-215-4
全国書店にて大好評発売中!!
発行:フィールドワイ
発売:メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp

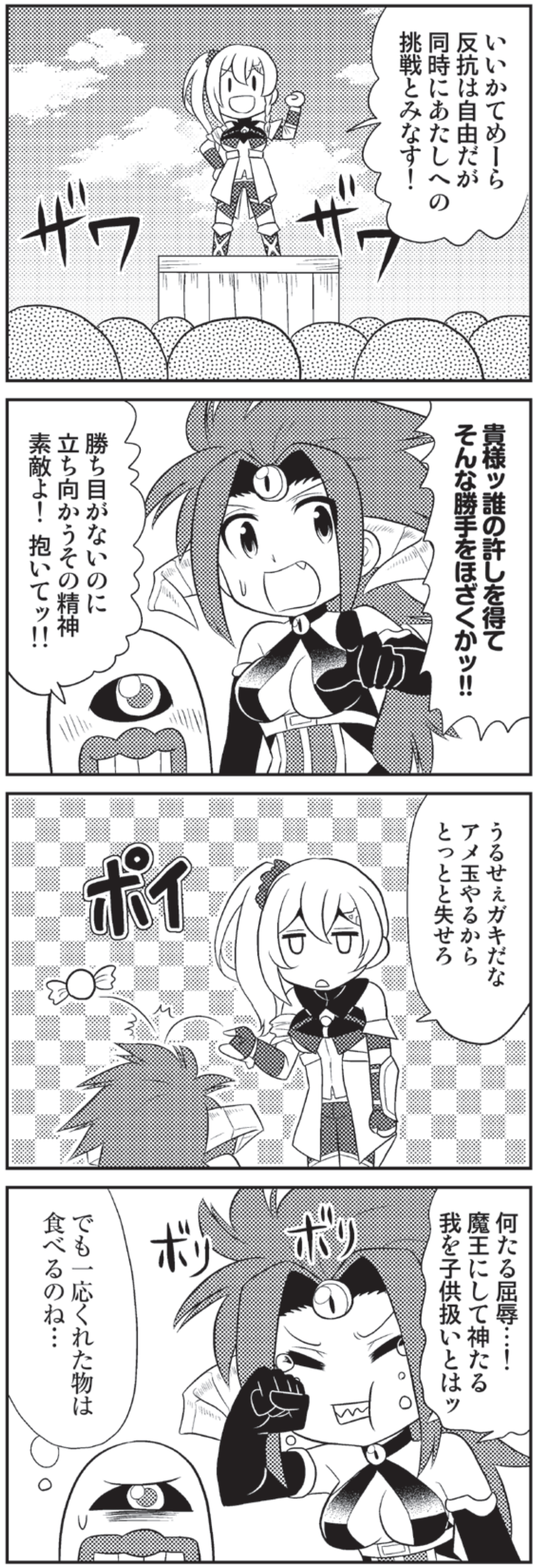
★海賊女王にアタシはなるわ!!★



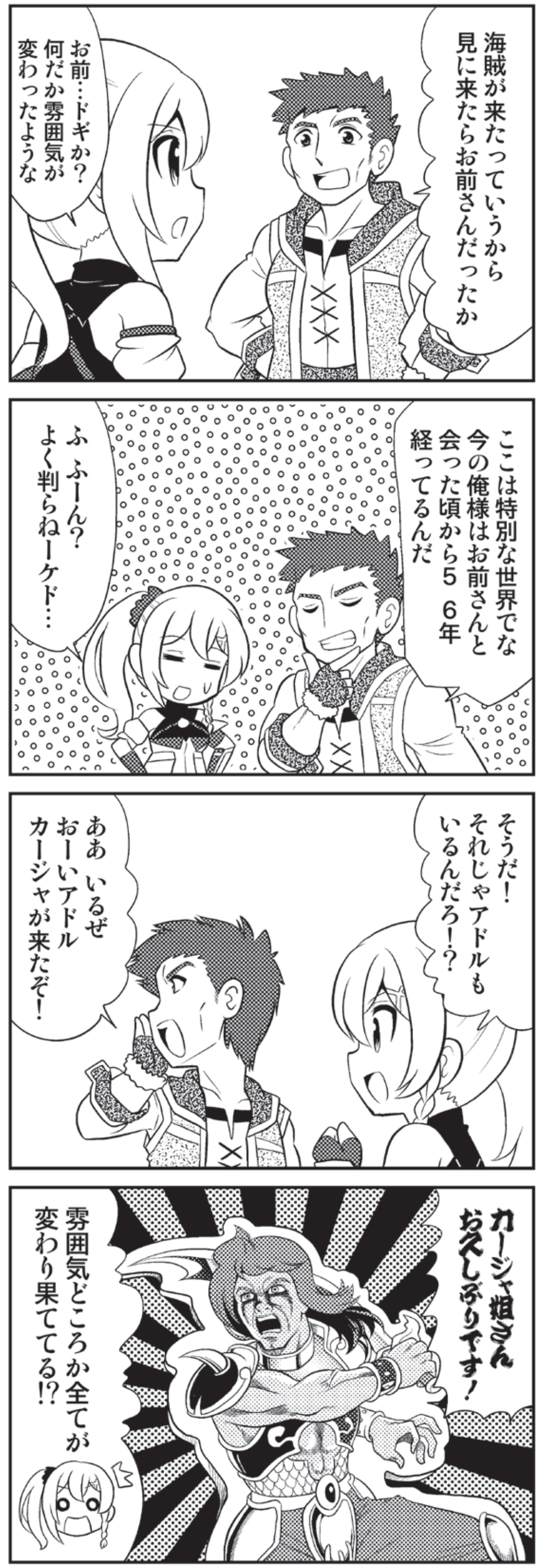
海賊姫と秩序



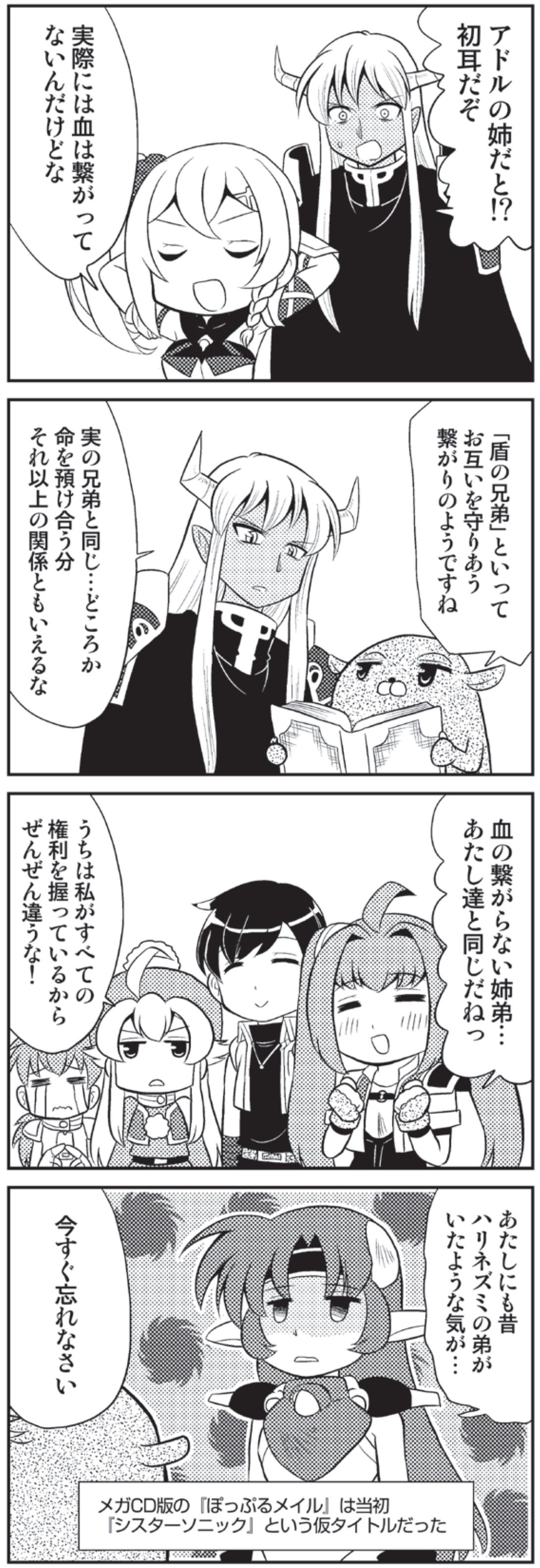
勇気ある挑戦



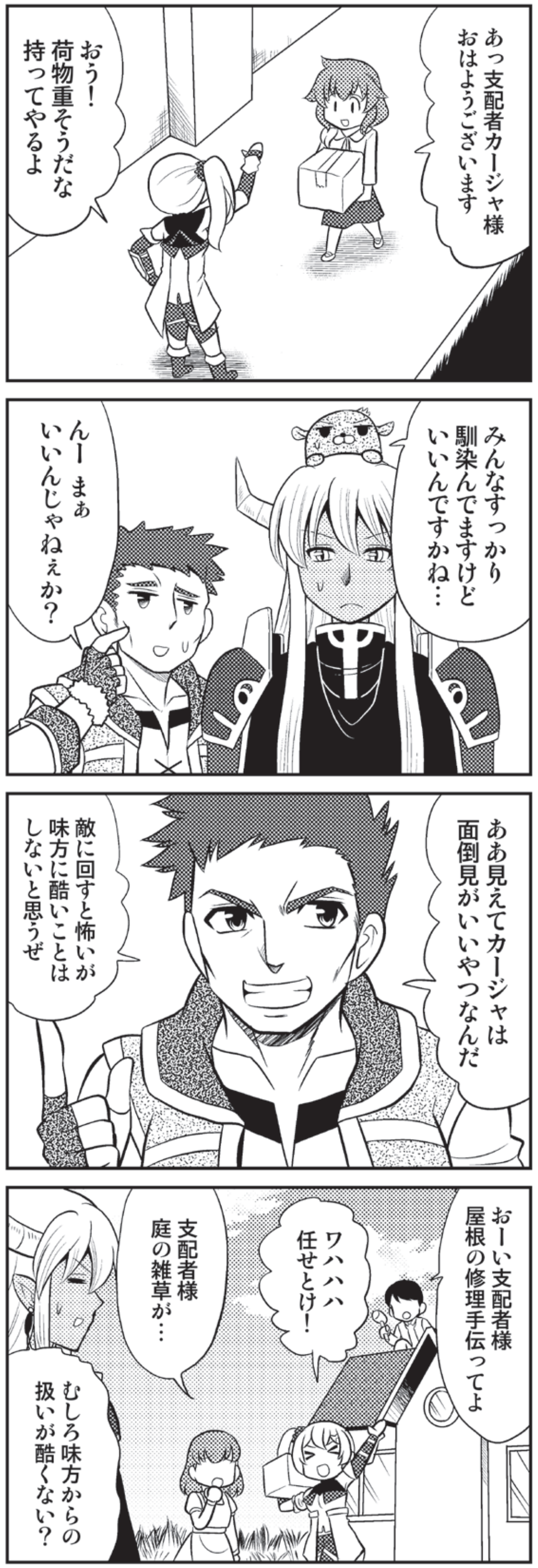
変わった雰囲気



盾の兄弟



支配される人々



もしもの話



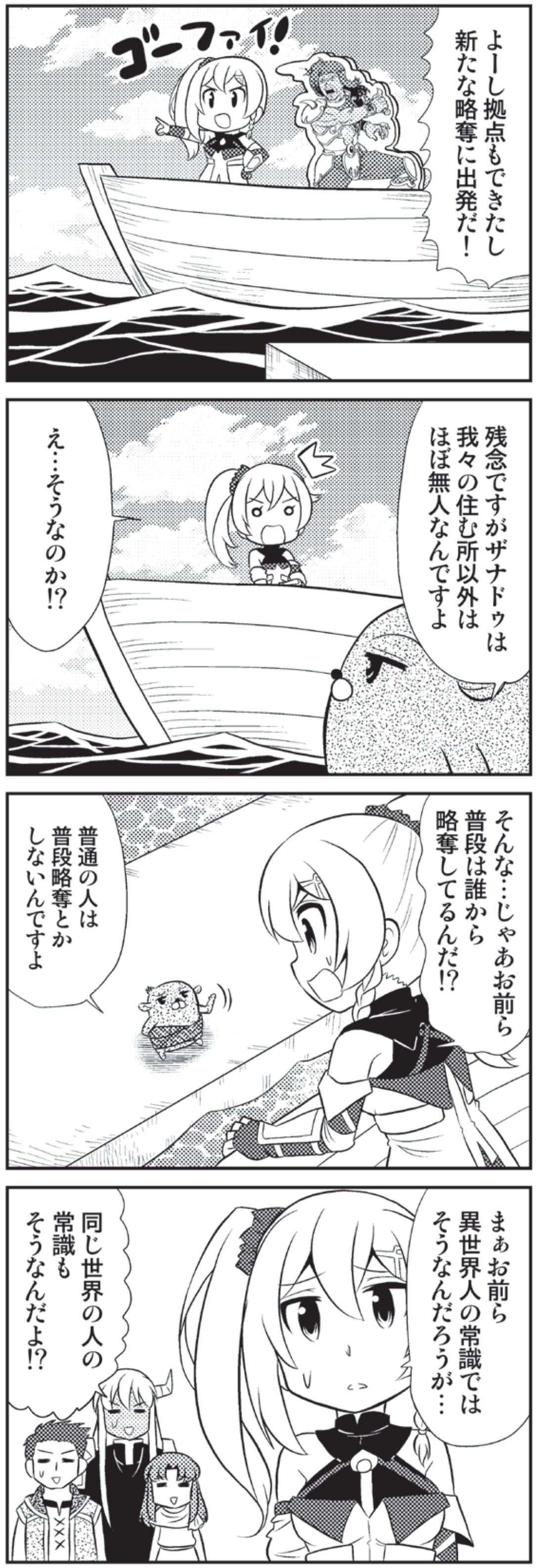
お嫁さんの条件



マナの力



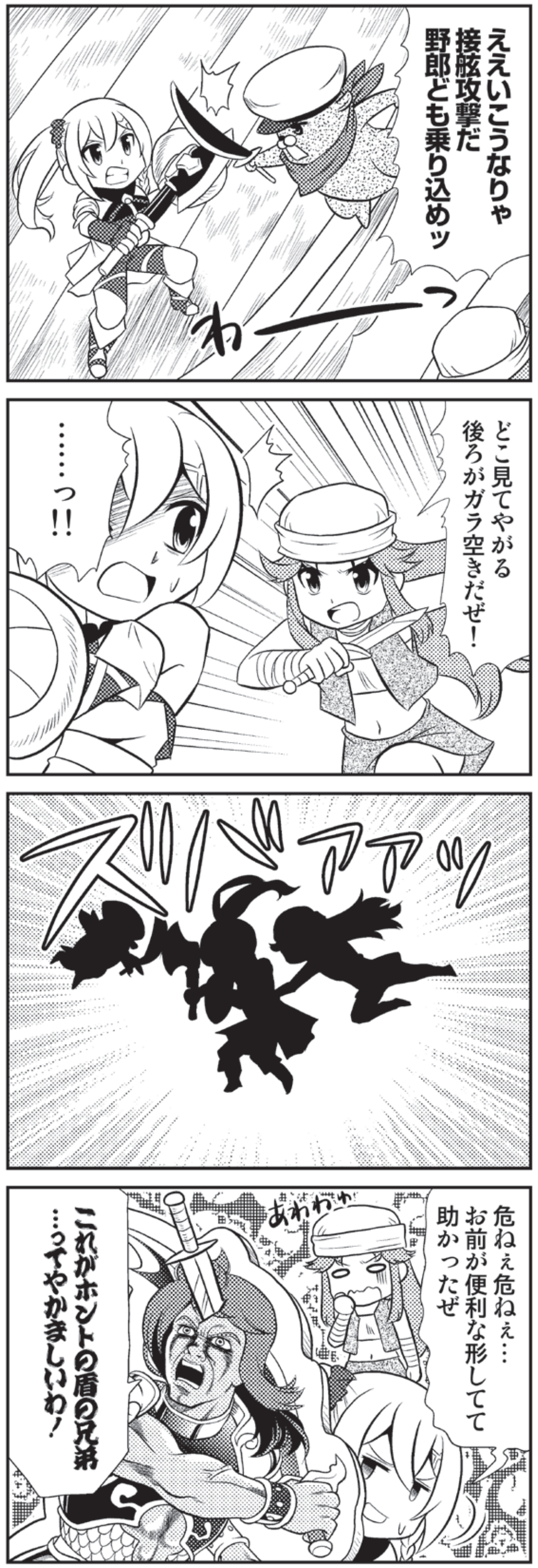
それぞれの常識



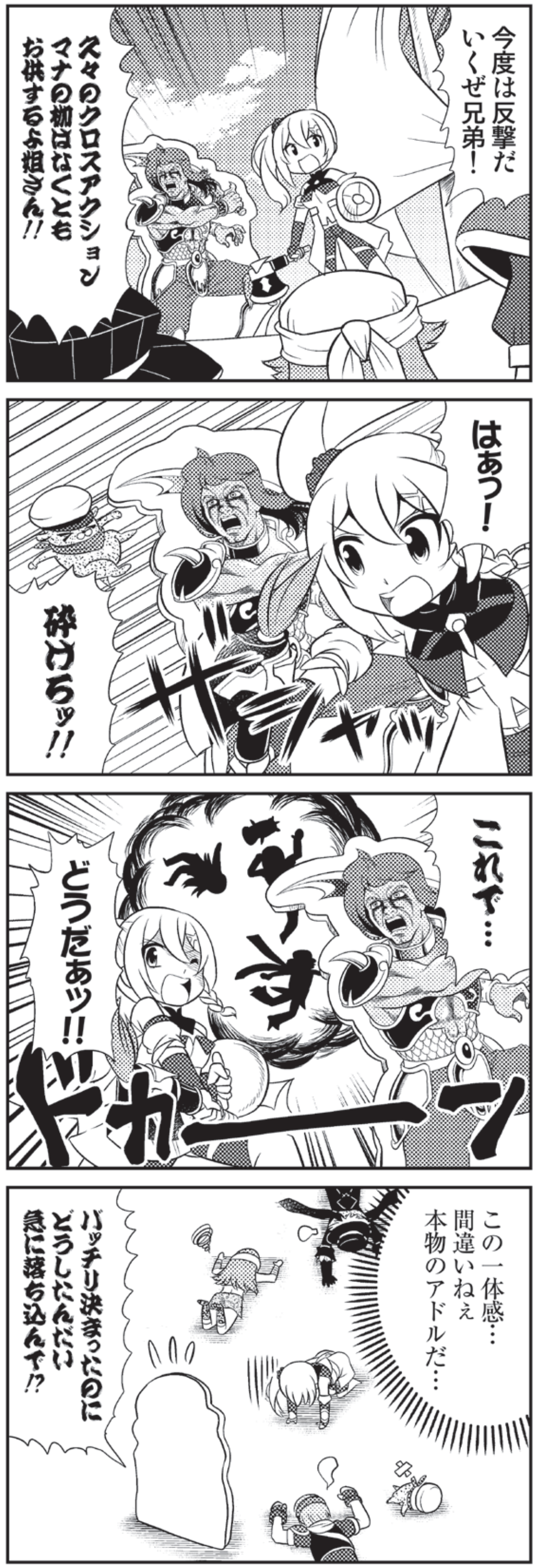
正義の海賊現る



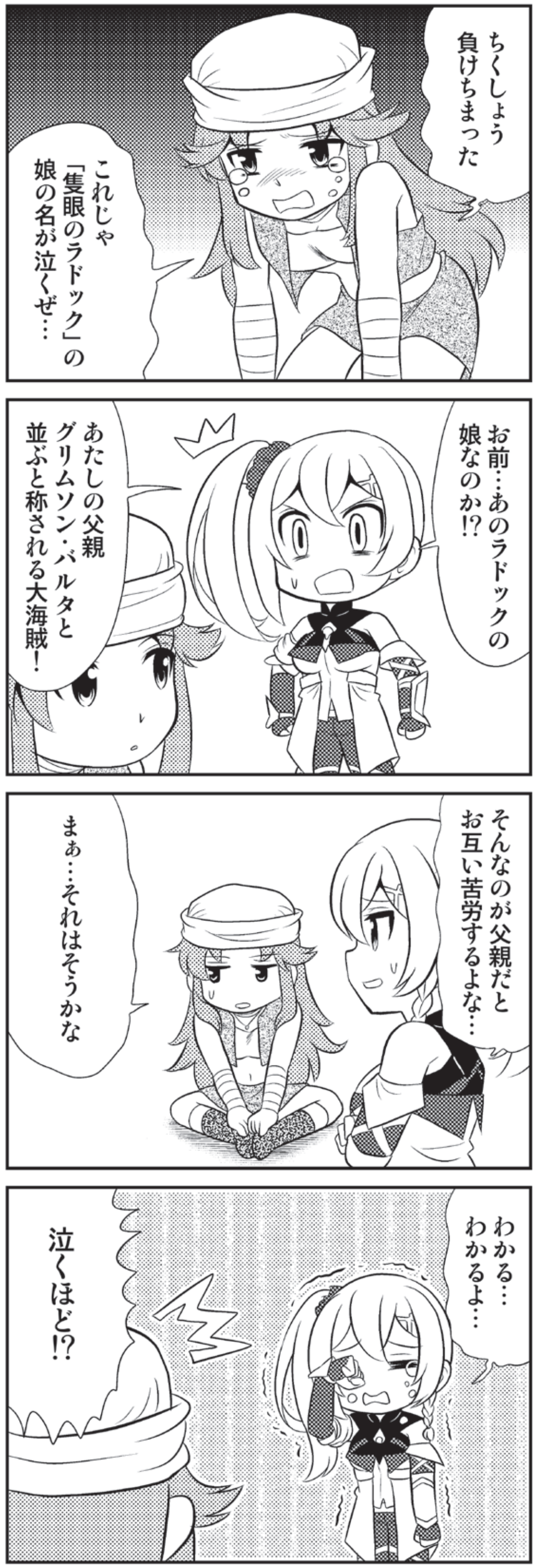
アボルダージュ



クロスアクション



わかりすぎる海賊姫



時をこえた再会





英雄伝説 創の軌跡
THE MISERABLE SINNERS 01
漫画：墨天業
《仮面の隠者》《暗殺者》《自律人形》
それぞれの思惑を胸に
運命と真実に迫る物語
定価：1000円（本体909円+税）
ISBN978-4-8021-3309-8
発行：フィールドワイ 発売：メディアパル
©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©BOKUTENGOU ©Field-Y



穏やかで騒がしい生活が戻ってきたファルコム学園。
徐々に英雄、戦士、さらには曲者までが還ってくるなか、
新たに「イースⅨ」のキャラクターも参戦！
まだまだ止まらない異能・新久保だいすけの筆が冴え渡る！
おまたせ！
待望の第2巻だよ！
も〜っと集まれ！
ファルコム学園②
新久保だいすけ
定価：本体 900 円+税
ISBN 978-4-8021-3213-8
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved. ©DAISUKE ARAKUBO ©2020 FIELD-Y

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

全国5カ所で「イースX展」の開催が決定！

「イースX -NORDICS-」の展示・物販などが期間限定で実施されます。各会場、期間中に「日本ファルコム」関連商品を3,000円（税込）ご購入・ご予約毎に「イースX」特製ステッカーをランダムで1枚プレゼント！
（※絵柄はランダム配布となります。※通販には特典は付きません。）



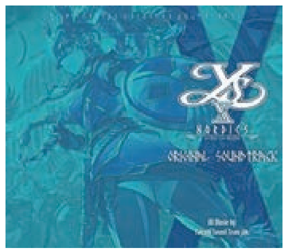


■**開催場所・期間**：オノデン1F（秋葉原）／2023年11月25日（土）～12月17日（日）
ジーストア名古屋／2023年12月23日（土）～2024年1月8日（月・祝）
ジーストア大阪／2024年1月13日（土）～1月21日（日）
ジーストア小倉／2024年1月27日（土）～2月4日（日）
ジーストア仙台／2024年2月10日（土）～2月18日（日）
■**入場料**：無料

特設サイト　https://www.geestore.com/event/gallery/ysx/

『イースX -NORDICS- オリジナルサントラ』予約受付中！

『イースX-NORDICS「』より劇中使用曲を完全収録したCD3枚組音楽アルバムが2024年1月18日に発売決定！
CD盤は初回生産分のみ、イラストカード11枚セットを封入した特製スリーブ仕様。
また、ファルコムショップでお買い上げの方には、「たつぐるみアドル&たつぐるみカージャ」のアクリルフィギュアスタンドが同封されます。









■**発売日**：2024年1月18日（木）
■**入価格**：CD盤 3,400円（税抜）／DL版 2,917円（税抜）／単曲 139円（税抜）／
ハイレゾ版 3,148円（税抜）／単曲 231円（税抜）
※発売日より、定額音楽配信サービスでの楽曲提供も開始

商品ページ　https://falcom.shop/products/detail/597

『壁掛&卓上ファルコムカレンダー2024』発売！

『壁掛』と『卓上』をご用意。『軌跡20th卓上カレンダー2024』は12か月分すべて描き下ろし。
お得なセット販売には、限定特典『特製ポストカード』も付いてきます。





■【カレンダー2024壁卓セット★特典付】

■**発売日**：2023年12月7日　■**価格**：5,000円（税込）　■**内容**：ファルコム壁掛カレンダー2024、軌跡20th卓上カレンダー2024、特典ポストカード

特設サイト　https://falcom.shop/products/detail/591

■【軌跡20th卓上カレンダー2024】

『軌跡シリーズ』20周年を記念し、12か月分すべて新規描き下ろしイラストを収録した『卓上カレンダー』をご用意。スタイリッシュなデザインなので、ご自宅だけでなく会社のデスクなどにも飾ってお使いいただけます。

■**発売日**：2023年12月7日　■**価格**：1,870円（税込）
■**内容**：表紙＋12枚　■**サイズ**：W180xH150mm（台紙）

特設サイト　https://falcom.shop/products/detail/590



■【ファルコム壁掛カレンダー2024】

2022年後半から2023 年を彩ったファルコムタイトルのイラストを収録した『壁掛カレンダー』。イラストがメインのデザインなので、寝室やリビングの壁に飾り、アートとしてもお楽しみいただけます。使用後は日付部分をカットすればポスターにも！

■**発売日**：2023年12月7日　■**価格**：3,300円（税込）
■**内容**：表紙＋12枚　■**サイズ**：B3タテ

特設サイト　https://falcom.shop/products/detail/589

【全国3か所】Falcom jdk BAND LIVE 2024開催！特典トート付きチケット発売中！

4年振りとなる日本公演東名阪ツアー《Falcom jdk BAND LIVE 2024》の開催が決定。東京公演を皮切りに、大阪・名古屋の計3か所で開催いたします！



【1】東京公演
■**日時**：2024年1月13日（土）開場18:00開演19:00
■**会場**：吉祥寺CLUB SEATA

【2】大阪公演
■**日時**：2024年1月26日（金）開場18:00開演19:00
■**会場**：246ライブハウスGABU

【3】名古屋公演
■**日時**：2024年1月27日（土）開場18:00開演19:00
■**会場**：ell.FITS ALL



■**出演者**：《Falcom jdk BAND》
佐坂めぐみ（ボーカル）／よしだ さくら（ギター）／関口功二（ギター）／ADD（サックス）／谷崎航大（ヴァイオリン）／gakia2（キーボード）／NAOKIX（ベース）／山崎善紀（ドラム）
■**座席**：スタンディング
■**料金**：¥6,000（税込）※特典「トートバッグ」付き

特設サイト　https://www.falcom.co.jp/jdk/2024/

チケット購入ページ(イープラス)　https://eplus.jp/sf/word/0000051908

『軌跡シリーズ』フィギュア化企画第8弾「ティオ・プラトー」＆第9弾「エステル・ブライト」予約受付中！

コトブキヤと日本ファルコムが贈る『軌跡シリーズ』フィギュア化計画第８弾「ティオ・プラトー」と、第９弾「エステル・ブライト」の1／8スケールフィギュアの予約を受付中です。



【ティオ・プラトー】
彼女の代名詞ともいえる猫耳型のヘッドセンサーや胸部装甲、こちらを見つめるクールな表情など、当時のティオの魅力を余すことなく再現。
彼女が開発にも関わった「魔導杖（オーバルスタッフ）」を、両手でギュッと握りしめたかわいらしいポージングにも注目です。

■**メーカー受注締切**：2024年1月30日（火）※以降は上限に達し次第受付終了
■**発売日**：2024年6月予定　■**価格**：20,900円（税込）

コトブキヤオンラインショップ
https://www.kotobukiya.co.jp/product/detail/p4934054056125/





【エステル・ブライト】
エステルの前から姿を消したヨシュアを探しながら、《身喰らう蛇》との闘いを描いたシリーズ第二作「空の軌跡SC」の衣装を再現。
往年のファンには馴染み深い、「空の軌跡SC」のキービジュアルを彷彿とさせるポージングで立体化！

■**メーカー受注締切**：2024年1月30日（火）※以降は上限に達し次第受付終了
■**発売日**：2024年6月予定　■**価格**：20,900円（税込）

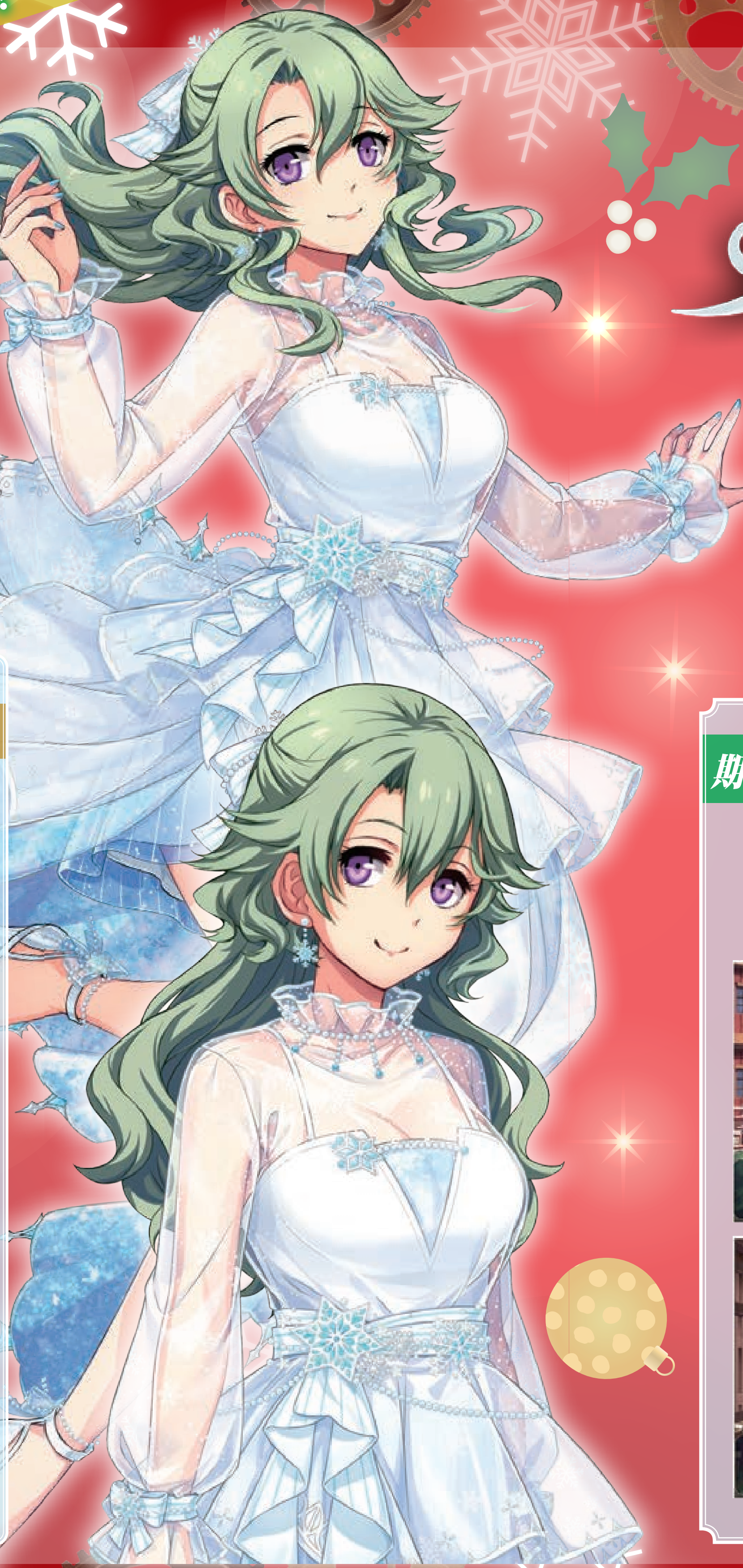
コトブキヤオンラインショップ
https://www.kotobukiya.co.jp/product/detail/p4934054056125

THE LEGEND OF HEROES
暁の軌跡
アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。
11 月に開催された「ナハトの奮闘記」では、ミシェルにお休みを楽しんでもらうために
ナハトたちが奔走することに！　そして、ミュゼがひと足早くクリスマス衣装を披露！

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/
公式 X
https://twitter.com/akatsuki_ujj

11月の新／衣装替えキャラクターをチェック！



Xmas・ミュゼ
ひと足お先にクリスマス衣装を披露したミュゼ。雪の結晶をイメージさせる純白で清楚なドレス姿がよく似合っている。

期間限定イベント「ナハトの奮闘記 Vol.28 ミシェル編」が実装！

多忙を極めるミシェルにたまには休暇を取ってもらうため、
ナハトたち試験班は協会の受付業務を担当することに。
この人数で取り組めば楽勝だと思っていたのだが……。
試験班の長い一日が始まるのだった……！









※このイベントは終了しています。

『暁の軌跡』極秘資料館

「Xmas・トワ」衣装デザインラフ
（2022 年 11 月実装）



「Xmas・ミュゼ」衣装デザインラフ
（2023 年 11 月実装）



※画像は開発中のものです。※上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。



『英雄伝説 閃の軌跡』のアリサたちが魔法少女に!?
脚本家・山下憲一（TVアニメ『みんな集まれ！ファルコム学園』）と漫画家・さがら梨々（コミック『閃の軌跡』）の強力タッグが贈るシナリオブックが登場！　平穏な日常に突如現れた怪物。その時、アリサのキーホルダーが不思議な光に包まれて……!?
あなたにお届け！
愛と希望の流れ星！
魔法少女
まじかる☆アリサ
決定編
著：山下憲一
イラスト：さがら梨々
原作：日本ファルコム
好評発売中！
判型：A5正寸／ページ数：160／定価：1,300円(税別)／ISBN978-4-8021-3131-5
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved. ©KENICHI YAMASHITA,RIRI SAGARA 2018 ©2018 FIELD-Y



英雄伝説
閃の軌跡06
原作／日本ファルコム
脚本／恵村まお　漫画／さがら梨々
A5判　160P　定価：本体991円＋税
ISBN 978-4-8021-3123-0
©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©SAGARA RIRI 2018
好評発売中!!
エレボニア帝国に吹き荒れる陰謀の嵐！
時代が選ぶのは果たして誰か!?
そして友という絆に背を向け、
両雄相まみえる！
激動のクライマックス！

第4話 笑顔の理由



1

焼きつけた写真が幾つもの山となって積み重なる机の空きに肘をつき、手のひらに顎を乗せながら、リベール通信社カメラマンのドロシー・ハイアットは、ぼんやりと天井の染みを数えていた。

ああ、あの染みの形はエルベ離宮に突入した特務飛行艇にそっくりです……。

「なあに、ぼんやりしてやがる」

声とともに、ドロシーの後ろ頭を良い音を立ててはたく者がいる。

振り向いて確かめるまでもなかった。

「痛いですよぅ」

ナイアル先輩、と言いながら、ドロシーは結局のところ振り返った。にやりと浮かべた笑みまで想像したとおりの顔がそこにあった。

「ぼうっとしてんじゃねえ。仕事はどうした」

「おやすみです」

「ほう?」

ナイアル先輩が顔を編集室の奥で座る男――編集長へと向ける。

「うちに、仕事をしない記者を雇っておくだけの甲斐性ってありましたかねぇ」

「そうは言うがね、ナイアル君。仕方がないんだよ」

「そうそうしかたないんです～」

「何がだよ」

「ポチ君がおやすみのときは、わたしもおやすみなんですよぅ」

「……カメラ、どうした?」

「オーバーホール中です～」

すかさず編集長が口を挟む。

「オーバルカメラだけにね!」

「……」

「……」

「えっ。あれ?　どうしたんだ、ナイアル君、ドロシー君」

「……」

「……」

「なんでそんなやっちまったなって顔を君たちはしてるんだ。つまりこれは、オーバルカメラとオーバーホールをかけたっていうだね――」

「すんません、編集長。ギャグの説明をさせるっていう苦行をさせちまって……」

「先輩、そこで謝るのはさらにコクですよぅ」

「君たち……そんなに給料が減ったほうがうれしいのかね」
じと目で睨まれて、ドロシーとナイアルはそそくさと自分の机に向き直った。
ふたたび手のひらの上に顎を乗せつつ、ドロシーは天井を見上げる。はあ、とため息をついた。
ヒマです……。
「おいこら」
「ほにゃ……？」
視線だけ動かして隣を見ると、おっかない先輩が顔を机の上の書類に向けたままで声をかけてきていた。
「でかいヤマが終わったばかりだからって、呆けてるんじゃねえぞ、こら」
「いえそんなことは――」
――あるかもしれない。
リベール通信社の本部がある王都グランセルは、つい先日にクーデター騒ぎがあったばかりだった。情報部の一部によって画策された用意周到なその反乱は、遊撃士と呼ばれる人々の活躍により阻止され、首謀者であるリシャール大佐の逮捕をもって幕を閉じている。
囚われていた女王と姫殿下も救出され、陰謀は潰え……。
女王生誕祭の裏側で何が起こっていたかを市井の人々が知ったのは、リベール通信社が第一報として特別号を発行してからだった。

その後も事件を大きく報じ続けたリベール通信は売れに売れた。
トップ記事をものにしたのは、今回のクーデター事件を最初の最初から追っていたナイアル・バーンズ――つまり、ドロシーの横に座っているおっかない先輩だ。記事の内容は市民から驚きとともに高く評価されている。
その連載も終わり、今はいつものリベール通信に戻っている。
世はなべてこともなし。
だからこそ、この機会にとドロシーは愛用のカメラをメンテナンスに出したのだし。
工房からは今日の夕方にならないと渡せないと言われている。
「代用カメラくらいもらってきてんじゃねえのか」
「それがですねえ」
ドロシーはようやく肘を机の上から下ろした。脇に置いていたそれを取り上げる。
「この子では、さすがにお仕事には向かないかと」
ドロシーは手のひらの上に置いたそれをナイアルのほうへと見せる。
書類を読むふりをしていたナイアルが顔を向けた。
「えらく小さなカメラだな」
ドロシーの手の上に乗ってしまうのだから、確かに大きくはない。ポチ君に比べると、三割ほど大きさを削った感じだった。

「代用カメラが出払ってまして、これを渡されました」
「ほう」
こんなことならカメラの全部をオーバーホールに出すのではなかった、と悔やまないでもない。
「今度出る新製品らしいです。『誰にでも綺麗に写せる』が合言葉で、ええとつまり、いっぱんふきゅー用ってやつですか」
「ほう。いいじゃねえか。何が問題なんだよ」
「『ちび君』は望遠も接写もできないんですよー。広角にレンズを替えることもできませんし、感光クオーツに記録できる枚数も十分の一なので。これだと、いちばんきれいな表情で撮ってあげられないかも……」
「……ちび君?」
「あ、この子の名前です~。小さいからちび君!」
「……」
「あれ? どーしたんですか、ナイアル先輩」
「なあ、ナイアル君。わたしばかりセンスを責められるのは納得がいかないのだが」
編集長がすかさず、というタイミングで言葉を挟んできた。
「えっ。なんでですか。だって、ギャグじゃないですよ?」

そう返したらすっごく怒られた。
呆れたナイアル先輩に、編集長の怒りが納まるまで、もう今日は仕事しなくていいから散歩にでも行ってろと追い出されてしまい。

そのおかげで、とある依頼を受けることになったのだ。

2

編集部の入っている建物を出て大通りへ。
居酒屋《サニーベル・イン》を右に曲がって、東街区を目指した。
目的地は《エーデル百貨店》。
百貨の名に恥じず、米や味噌のような生活必需品から高級アクセサリまで幅広く売っている。ドロシーの薄給では金銀細工など手が出ないけれど、見るだけでも楽しいし、安くて美味しいお菓子もいっぱい並んでいる。
共和国大使館と向かい合っている南口まで辿りついた。
百貨店へと向かおうとしたところで声を掛けられた。振り向いて、意外な人物に目を丸くする。

「あのぉ」
おそるおそるといった様子で声をかけてきたのは大使館の門番だったのだ。
「はい。なんでしょう？」
「ウッス。姐さん、お疲れさまッス」
「あ、姐さん⁉」
そんな呼ばれ方は初めてだ。
「ウイッス！　あ、姐御のほうがいいッスか」
姐御⁉
「姐さんでお願いします〜」
「あのぉ、リベール通信社のカメラマンの方ッスよね？」
「あ、はい」
ドロシーは驚いてしまった。自分はそんなに有名だったろうか。記名記事を書いているナイアル先輩ならば、わからないでもないのだが。
「ちょっとお時間よろしいッスか？」
「はあ」
「リベール通信の武術大会の写真を見たッス」
「ああ……」

なるほど、とドロシーは納得してしまう。
女王生誕祭の前に行われた武術大会を撮ったドロシーの写真は、けっこうな枚数を紙面に載せることができたのだ。クーデター騒ぎの起こる前で、そこここに不穏な前兆はあったものの、全体的にはリベール王国は平和だった。
今年は変則的な大会だったために、逆に市民の好奇心を煽ったらしいし。
この兵士はおそらく武術大会に興味があって――でも、大会の記事ってカメラマンの名前まで載っていたかな？
「いつもリベール通信社のほうから大きなカメラをもって、この通りの前を走っているッスよね。走ってる回数と転んでいる回数が同じくらいッスけど」
ドロシーの頬が熱くなった。
――そ、そんなに転んでないですよぅ！
「あ、いえ。……はい」
「で、ジンさんの写真、余ってないスか」
「は？」
「ジン・ヴァセックさんッス」
「あの、遊撃士の？」
「はい！　おれ、あのひとのファンなんッス。すっげぇ強いのに、すっげぇ優しいッス！」

「ああ、はい。確かに……」
ドロシーもそれは知っている。
あの大柄な遊撃士の青年は、相手が魔獣であろうとも、意気投合したら命を賭して助けてしまうくらいには優しい。
つまり、そうとう気合の入った優しさをもっているということだ。
そうかとドロシーは思い当たる。この人は東方の共和国の大使館の門番だ。ということは、ジンさんが王都に滞在していた間は何度も会っているはずだ。
「おれ、武術大会を見に行けなかったッス。強いとは思ってたけど、まさか優勝するなんて……見に行けなくって、すっげぇ悔しいッス」
「それで写真を？」
「ウッス！　新聞に載ったやつでいいッス。いただけないッスか。家に飾って、励みにしたいんスよ！　おれも、いつかあんな風にカッコイイ男になりたいッス！」
「え〜」
それは難しいんじゃなかろうか、とドロシーは思った。
《不動のジン》といえば——ナイアル先輩によれば——出身の東方だけでなく、リベール王国にまで名を知られた遊撃士だ。熊のごとき体格を持つ偉丈夫で、己の身を武器として戦う稀代の格闘家なのだ。

チーム戦の武術大会なのに、たったひとりで参加し、予選を勝ち抜いた男。
あの遊撃士コンビのエステルとヨシュアを加えた本戦では優勝までしてしまった。
「それにはよっぽどたくさん食べないと〜」
「体格の話じゃないッス。心意気ッス！」
「あ〜」
ですよねー。
「なので、どうしても一枚でいいから欲しいんスよ。お願いするッス！　リベール通信の写真、見たッス！　あの構図、あの迫力、最高だったッス」
ドロシーは困ってしまった。
自分の写真を誉められるのはうれしいし、確かにジンを写した写真はある。
何枚もある。
紙面に一枚の写真を載せるためには、その裏でたくさんの没が出るものなのだ。よく撮れていても、記事に割かれたスペースの都合や、テーマに合わなかったり、似たような写真が多かったりすると使えない。
それどころか、そもそも感光クオーツは残っているから、もういちど焼きつければ紙面を飾った写真を印刷することも可能ではある。
「でも……あの、そういうことはあまりしてなくて、ですねー」

武術大会の写真に限れば事前に会社から参加者に写真の公開許可を取ってあるので、盗み撮りを捌くような真似にはならない。とはいえ……。ここでOKしてしまうと、際限なく頼まれてしまいそうな気もする。
「そ、そうッスか……」
「あ、あの」
がっくりとうなだれられてドロシーはつい同情してしまった。なんとかならないだろうかと思考を巡らせ、ふと思いつく――そうだ！
ドロシーは腰のポシェットから一枚のポストカードを取り出した。
「代わりに、これでどうでしょう？」
「おお⁉　こ、これはすげえええ！　イカスッス！　最高ッス！」
それは、《不動のジン》が魔獣と戦っている写真をポストカードにしたものだった。
天をつくような大きな魔獣を相手に対峙しているジンが映っている。
つい最近にとある温泉旅館の女将さんに土産物として作成を依頼されたものだ。見本として刷りだしたものの一枚だが、これならば配ることに問題はない。
そもそも配布用のものなのだし。
「いただけるッスか？」
「はい～。それでよろしければ～」

「ウッス！　姐さん！　商売おつかれさまッス！」
「いえ別に商売ではないのですが」
――そこは素直にありがとうだけで良かったですよ～。
まあ、喜んでもらえてなによりだ。そう思って立ち去ろうとしたときだ。
「これは確かにいい写真だな～。お姉さんが写したの？」
門番の声とは別の声で言われた。
ドロシーは振り返る。
門番が見入っている写真を肩越しから覗きこんでいる青年がいた。
青年が顔をあげる。
「やあ、僕、アントンっていうんだ」
「はい～？」
「ねえ、お姉さんの名前は？　もしかしてカメラマン？」
門番の背後からドロシーの前までやってきて尋ねてきた。
「ドロシー・ハイアット、はい、リベール通信に勤めております～」
ひととおり答えてから、改めて目の前の青年を見つめる。
明るい茶色の髪と、なにやら思いつめたようにも見える少し寂しそうな瞳をしていた。思いつめたというか思い込みの激しそうなというか。

ひとことで言えば、厄介ごとを持ってきそうなというか……。
アントンが口を開いた。
「ねえ。僕も一枚、写真を頼んでいいかな？」

3

「ええと、アントンさん。なぜ、わたしたちはこのような真似を？」
ドロシーとアントンは腰を屈めて百貨店前の植え込みに隠れている。
「もうすぐだよ」
「もうすぐ？」
「来た！」
誰がですか、と聞く前に、ドロシーの視界の隅にひとりの女の子の姿が映る。
慌てて頭を下げた。
見つかったらどう言い訳しよう。心臓がドキドキしてきた――なんで、こんなことに！
通り過ぎる彼女は、隠れているドロシーたちに気づくことなく、植え込みの前を歩いて、百貨店の南口を西へと向かって歩き去った。
ほうっとドロシーは安堵の息を吐く。

彼女の背中が小さくなってから、アントンが植え込みの陰から立ち上がった。釣られるようにしてドロシーも立った。
「あのひとの名はメーシャ」
「は？」
「メーシャっていうんだ。いい名前でしょ」
「あ、はい。そうですね」
「可愛いでしょ？」
「あー……」
見えたのは主に後ろ姿でしたので。
――ひょっとしてアントンさんの彼女さんとかでしょうか。となると、いっぱい誉めておいたほうが喜ぶのかもしれない。
「ええと、その――確かにかわ……」
「振られちゃったんだよね、僕……」
言わなくてよかったあああ！
「そ、そうでしたか」

アントンがうな垂れていた。両の肩も下がってしまい、まるでドロシーが叱りつけたかのようだ。
「僕、この街を出ることにしたんだ」
「そ、そうですか」
「そう！　新しい恋を探すのさ！」
「はあ」
「僕、毎日彼女を見つめていて、ドキドキしていたんだ」
——ドキドキ……ええ、わたしも確かにしました。見つかりはしないかと。
「心が高鳴るっていうのかな？　僕、彼女の笑顔が大好きだったんだよなぁ。この百貨店の前ですれちがったときは、必ずラッキーなことが起こったし。運命だと思ってたんだけど」
「らっきーですか」
「とれたて卵の黄身がふたつだったり」
「あー、ありますよね～。双子の卵」
「新鮮ミルクが本当に新鮮だったり！」
「新鮮じゃないと売れない気がします」
「泥つきニンジンにちゃんと泥がついていたり！」
「それラッキーなんでしょうか……」

ドロシーの言葉はアントンの耳には届いていないようだった。
「仕事も見つからず、何もしないまま一日を終えてしまった。そんな風に落ち込むばかりだった僕の生活を、メーシャは明るくしてくれていたんだ。まあ、結局、仕事は見つからなかったんだけど……」
「そ、それは……」
何と言って慰めていいのやら。
アントンの言葉からドロシーが理解した限りでは、彼はどうやらこの王都で仕事を探していたらしい。だが、女王生誕祭で常とは違う業務に忙しく追われていた街の人々は彼の相談に乗ることができなかったようだ。
「そこで、お姉さんの出番なんだ！」
「えっ？　わたしですか？」
「うん。僕、メーシャの笑顔を忘れたくないんだ。少なくとも新しい恋の相手を僕が見つけるまでは。でも、心の奥底にどんなに深く焼きつけたつもりの記憶だろうと、時の流れには勝てないのさ」
アントンの言葉に、かつて先輩記者の言った台詞が頭を過ぎった。
記憶の中の思い出はいつか色あせるものだ、と。
「歳月という名の雪が、楽しかったり辛かったりした思い出という名の大地を、最後には覆い

隠してしまうんだよ」
「し、詩人さんなんですね」
「だって、恋しているから！」
　……振られたのでは？　とはさすがに突っ込めない。ドロシーにもそれくらいの機転は利いた。辛うじてだが。
「お姉さん。僕、彼女の笑顔の写真が欲しいんだ」
「笑顔……の？」
「うん。さっきの門番に見せていた写真を見て思ったんだ。あの大男を撮った写真は彼のカッコよさを充分に写し取っていた、ってね」
「そ、それほどでも～」
「彼女の笑顔を写し取ったあんな写真があれば、僕は新しい街でもきっと頑張れると思う！」
　きらきらした瞳で見つめられてしまい、ドロシーは断るための言葉を咄嗟に思いつくことができなかったのだ。
　心の中でだらだらと冷や汗が垂れている。
――なんだかとってもまずい話の流れになっている気がしますよぅ！
　それに……とドロシーは思ってしまったのだ。
　もしここで断ったら、次の街でも彼の仕事は見つからないかもしれない。

　なんといっても彼はさきほどメーシャとすれちがっている。
　つまり、ラッキー状態にあるはずで、ここでドロシーが断ったら、アントンのジンクスを信じる心もぺちゃんこに潰れてしまいそう。
　落ち込んだ気分のままグランセルを旅立つことになるわけで……。
「わ、判りました。なんとかできるかどうか……少し考えさせてください」
　そう返すのが精一杯だった。

4

　夕方に百貨店前で再会することを約束して、ドロシーはアントンと別れた。
　ひとりきりになって、ドロシーは考える。
　さて――どうしたもんでしょう。
　アントンによれば、メーシャは一日に何度も百貨店の周りを散歩しているらしいから、カメラに収めるだけならば難しいことではないだろう。
　ただ、それでは盗み撮りみたいになってしまう。
　ジンさんの武術大会の写真は撮影の許可を得ていたし、そもそも公開されている姿であってプライベートではない。

ポストカードは本人に断ってある。
メーシャの場合はそれらのいずれとも違う。
それに、とドロシーはもうひとつ別の問題があることに気づいていた。
ドロシー・ハイアットには周りの風景の表情が見えた。
空や月や星や建物が泣いたり笑ったりしているのが判るのだ。
けれども、どうやら他の人々には、彼らの表情が見えないらしい。
「みんなも同じだと思っていたんですけれどねー」
問わず語りになってひとりごちてしまった。
自分自身で思っているところでは、ドロシーは目の前に存在する風景たちの数多の表情を切り取っているに過ぎない。
裏を返せば、ある表情を撮りたいと思って撮影したことはない。あるものをあるがままに切り抜くのがドロシーの写真だった。
スナップショット。
写す対象を、自然にそのまま素早く切り取った写真をそう呼ぶのだけれど、ドロシーは自分の写真をスナップショットみたいだと思っていた。
報道機関であるリベール通信社に籍を置いているのもむべなるかな。
ということで、だ。ある特定の表情を写して欲しいと依頼されたことはないし、そういう目

で対象を見たこともない。
「笑顔……ですか」
ひとはどういうときに笑顔になるのだろう。
あのメーシャという女の人はどうすれば笑顔になってくれるのだろう。
「困りました……」
ううむ、と頭をひねっても何も浮かばない。考え続けていたら、熱が出てきた。
こういう頭を使うお仕事はナイアル先輩向きであって自分向きではない。ドロシーはそう思う。
「これは……ムリです！」
ちび君を抱えたままドロシーは歩き出した。
仕方ない。いつものようにとりあえず街をあちこち歩いてみよう。お気に入りの風景を写しているうちに何か思いつくかもしれない。
百貨店から帝国大使館のほうへと歩きだす。
公園の屋台に寄って冷やかしつつ、帝国大使館前を西に折れる。大通りに出て、右に曲がればグランセル城だ。左に曲がれば遊撃士協会の支部がある。
太陽は中天にあり、足下に小さな影を落としていた。見上げれば青い空。白い雲がひとつふたつぽっかりと浮かんでいる。

「ご機嫌よろしいですねー」
雲に向かってちび君を構えてボタンを押し込む。レンズと感光クオーツを隔てるシャッターが一瞬だけ開いては閉じる軽やかな音を響かせて、ゆるんだ顔を浮かべた蒼空の表情が記録された。
手元側の投影板に写された景色を見て確認する。
「まあ、悪くないですよね」
ちび君の投影板はポチ君に比べると、少しだけ小さくて見づらいけれど、ドロシーが切り抜きたいと思った空の表情がそこにあった。
ピントを合わせる必要もなければ、絞りや露出や被写界深度を気にする必要もないので、楽ちんではある。物足りないとも言うが。
「うふふ……美人さんですよぅ」
写した風景に満足して、ドロシーはそのまま大通りを西へと渡る。
とりあえず目指したのはグランセル大聖堂だ。
王都に建てられただけあって、王国内にある七耀教会の聖堂ではもっとも大きい——たぶん。
心を落ち着けて何かを考えるには良い場所だ。
ゆっくりと周りの景色を楽しみながら歩いていく。
平日の仕事時間だから人通りは多くない。おかげで誰かにぶつかることもなく、何かに躓くこともなく、ドロシーは辿りついた。
両開きの大きな扉には鍵は掛かっていなかった。
大聖堂は「求める者すべてに開かれている」と常日頃から主張している。
泥棒が銀の燭台を盗み出そうともだ。
説教壇の前に何列にも並べられた横長の椅子のひとつひとつに腰かける。ちょうど午後のお説教が始まるところだった。ゆったりとしたローブに身を包んだ司祭さまが登壇すると、座っていた人々のおしゃべりがぴたりと止んだ。
軽く笑みを浮かべ、空の女神(エイドス)の教えを語り始める。
朗々とした声の司祭さまだった。
聞いているだけで心が穏やかになって……眠くなってきた……。
肩を揺すられ気がついた。司祭さまも降壇しており、視線の先の説教壇も空っぽで、その奥にあるステンドグラスからは少し傾いた日差しが七つの色をまとって降り注いでいる。
「お疲れは取れましたかな?」
ドロシーを起こしてくれた手の持ち主が言った。
声に振り仰いではっとなる。ドロシーの脇に立っていたのは、さっきまでお説教をしていた司祭さまだった。
「う、あ、はい！　とても！」

正直にそう言うのが精一杯。そんなところで嘘をついてもしかたないし。
「それはよかった」
と、にっこり。
ドロシーの頬が熱くなった。
「ご、ごめんなさい～」
「よろしいのですよ。エイドスさまが休みなさいとおっしゃられていたのだと思います」
そう言って、ふたたび微笑む。
大切な説教の最中に寝てしまったのだ。怒っても当然。それなのにこの笑顔だ。
申し訳ないやら、恥ずかしいやら。
もういちどだけ謝ってから外に出た。
馴染みの喫茶店のほうへと向かいながらドロシーは考える。
司祭さまはどうして笑顔だったのだろう。怒りだしてもおかしくないはずなのに……。

5

リベール通信社の入っている建物にもっとも近い喫茶店が、コーヒーハウス《バラル》だった。この店の濃縮エスプレッソは目を覚ますのにちょうどいい。昼というには遅すぎるが、少しお腹も減ってきたところだからカレーでも食べようか……。そんなことを考えながら、ドロシーは店に入った。
昼食時ではなくなっていたけれど、代わりに午後のお茶の時間だった。
おかげで店内が混んでいる。
カウンターしか空いておらず、ドロシーはマスターの前の席に陣取った。
コーヒーを淹れるまでのわずかな時間、椅子の上で身体ごと振り返って店の中を見渡す。景色を眺めることも好きだが、ドロシーは人間を見ることも嫌いではない。
とくに今は、人々の表情に関心がある。
ドロシーの瞳は店内の人々の顔を順に追っていった。
窓際に陣取り、ずっと外の通りを眺めている青年がいる。なんとなくそわそわして落ち着かなさげ。店の時計を眺めては時々ため息をついていた。
奥の席では、運ばれてきた飲み物に手をつけず、本から目を離さない少女がいた。どうやら物語はクライマックスを迎えているらしくて、視線は真剣そのものだ。顔つきは息を呑んだような表情のままで固まっていて、今にも泣き出しそう。哀しい場面なのだろうか……。
その手前の席には、向かい合って座っている老夫婦がいた。なんだか喧嘩しているみたいだ。婦人のほうが怒った顔のままそっぽを向いていた。夫のほうも意地張って胸の前で腕を組んだままむっつりとしている。

——いろんなひとがいるものですねー。
改めて思う。
色々な人がいるだけではない。それらの人々が一瞬たりとも同じ表情を浮かべていないのだ。
百万の顔に百万の表情が浮かぶ。
「笑顔、ですか……」
難題だった。
「どうぞ」
マスターの声に我に返る。
振り返ったとたんに、コーヒーの匂いが鼻をくすぐった。淹れ立ての濃縮エスプレッソが小さなカップに注がれて目の前に置かれていた。ありがとうと礼を言い、ソーサーから持ち上げたカップに口をつけたところで——吹きそうになった。
ドロシーの真横で突然にあがった赤ちゃんの大きな泣き声が鼓膜を叩いたのだ。
若い母親がカウンターに座り、赤ん坊をあやしている。思わず見つめてしまったドロシーに気づくと、すまなそうに頭を下げた。何か心に気のかかる事があるような、少し暗い表情をしている。
ほらほら、と赤ちゃんを揺すり、そっと胸元に抱き寄せる。そういえば、とドロシーは思い出した。赤ん坊というのは母親の心臓の音を聞くと安心するのだという。自分が母親のお腹の中にいたときを思い出すからだ、などと言う人もいる。
火のついたようだった泣き声が少しずつ収まってゆく。
わずかに安堵の表情を浮かべた母親がドロシーのほうへと顔を向けた。
「ごめんなさい。うるさくしてしまって」
「いえいえ」
カウンターの奥へと引っ込んでいたマスターがやってきて、母親に小さなメモを手渡した。
手にしたメモに目を走らせた母親の顔にうれしそうな表情が浮かぶ。
「よかった……」
マスターに向かって会釈をすると、母親はスツールから立ち上がった。顔にはようやく小さな笑みが浮かんでいて。「さあ、帰りますよ」と抱いた赤ん坊に声をかけた。
まだ言葉を解するような歳ではないが、母親の顔に釣られるように、赤ん坊のほうにも笑顔がはじけた。キャッキャという明るい笑い声が店内に木霊する。
天使の声のようだ。陳腐な喩えだけれど、ドロシーは素直にそう思った。
カランとドアベルを鳴らして母親と抱きかかえられた赤ん坊は店を出て行った。
「あの方のお家には導力通信機がないようでね。遠い地に住む病気だという母親の様子を連絡してもらうことになっていたんだが——」
マスターがドロシーに教えてくれた。

「――どうやら峠を越えて回復したらしいよ」
「そうでしたかー。よかったですよぅ」
「心配そうにしていたからね」
「えっ？」
「君がだよ、ドロシーさん」
「あ……はい」
　だからわざわざ教えてくれたのか。
　親子の背中が消えたドアを見つめていると、入れ替わるようにして息を切らせて駆け込んできた少女がひとり。まっすぐに窓際の席へと向かうと、何度も通りを見つめていたあの青年のところへ。
　憂い顔が鮮やかな笑顔に変わる瞬間をドロシーは見てしまった。
「待った？」
「ちっとも」
　晴れやかな顔のまま青年はそう応える。
　時計を見るに、かれこれ一時間は経っていたと思うが、青年はそれをおくびにも出さなかった。まあ――彼にはお釣りがくるほどうれしいのだろう。そそくさと会計を済ませると、ふたりは連れ立って店を出て行った。

　かちゃり、とカップとソーサーのぶつかる小さな音が聞こえた。
　本を読んでいた少女だ。冷め切ってしまったコーヒーにようやく手が伸びたらしい。
　小さな口許へとカップを運んでいる。
　胸元に大切そうに読んでいた本を抱きかかえ、カップをソーサーに下ろしてから、大きくほうと息を吐いた。夢見るような瞳のまま、すこし上気した頬の少女は、満足げに微笑んだ。クライマックスを迎えた小説はどうやらハッピーエンドで終わったらしい。
　いつのまにかその手前に座っていた老夫婦は仲直りしている。長い歳月をともに過ごした夫婦らしい落ち着いた笑みを浮かべたまま何事かを語り合っていた。
　その瞬間、コーヒーハウス《バラル》には笑顔があふれていた。
「あ～、そうでしたか～」
　ドロシー・ハイアットは答えを見つけたのだ。
　カウンターに向き直ると、さきほど口をつけずに飲み損ねていたカップを傾ける。
　砂糖をたっぷりと入れたエスプレッソは苦かったけれどとても甘くもあって。
「美味しいですー」
　思わず頬が緩む。
「それはよかった」
　マスターが笑顔を返してくれた。

6

日が西へと傾き夕映えが王都の街並みを包んでいる。白い煉瓦の道も空の色を照り返して赤く染まっていた。

《エーデル百貨店》の南口で待っていると、アントンがやってきた。

「どうだった？」

アントンは旅支度をしていた。ひょっとしたら、このまま次の街へと行くつもりなのかもしれない。

「ええと、その……」

「そうか、駄目だったんだ……」

「というかですね。あの～」

ドロシーはポシェットから一枚の写真を取り出した。

「あ！」

メーシャの写真だった。

紅茶に溶かした蜂蜜のようなステキな笑顔を浮かべている。場所は、ココ――百貨店前だ。背後に《エーデル百貨店》の建物と看板が映っている。

「すごい！　これこそ、彼女の笑顔だよ！」

アントンが手を伸ばそうとしたが、ドロシーは写真を引っ込めた。

「あ……」

「これは違うんです」

ドロシーの言葉にアントンが不思議そうな顔をする。予想していたとはいえ、少し心が痛む。だが、この笑顔は違うのだ。

「実は、これはメーシャさんに直接お願いして撮らせてもらったものなんです。だから、お渡しできません。そういう約束ですので」

さすがに見知らぬ人間に渡すための写真を撮らせて欲しい、とは言えなかった。

「でも、せっかくそんなにかわいらしく映っているのに……」

アントンの顔に不満そうな表情が浮かぶ。

その顔にドロシーはちび君を向ける。すかさず写してから、カメラをひっくり返して手前の投影板をアントンに見せた。

ふくれっつらをしたアントンのスナップショット。

自分の不満顔を写されて、アントンが当惑したような顔になる。

「あの……怒らないで聞いてくださいね」

ドロシーの見つけた答えを判ってもらえるかは賭けだった。噂によれば恋をしている人間に

は理屈が通じないものだというし。
「実は、わたしあの後ずっと、メーシャさんに笑顔になってもらうにはどうしたらいいだろうって考えていたんです」
　ドロシー側の特殊事情を話して聞かせる。
「わたし、撮った表情が笑顔であったことはあっても、笑顔を探し出して写した経験ってなくって、人間ってどういうときに微笑むんだろうって……」
「笑顔になるとき……？」
「そうです」
　ドロシーの心の中に今日一日のグランセルを歩き回った思い出が甦ってくる。
　母親と抱えていた赤ちゃんの笑顔。
　大聖堂の司祭さまの笑顔。
　待っていた恋人がやってきたときの青年の笑顔。
　夢中になっていた本をハッピーエンドで読み終えたときの少女の笑顔。
　歳経た夫婦の皺を深くした優しい笑顔。
　今日一日だけでもドロシーはたくさんの笑顔に出会った。そんな経験をアントンに話しながら、ドロシーは最後にこうつけ足した。
「笑顔はうれしさの反射なんじゃないかなって……」

「うれしさの……？」
　ドロシーの言葉を聞いても、アントンはまだピンとこないようだった。
「うまく言えないんですけど。母親が笑顔だったら子どもは笑うし、赤ちゃんが笑ってくれれば母親だって笑顔になるものでしょう？　出会った出来事が安心できて優しい気持ちになれたときに人は笑顔になるんだと思います」
　笑い話に大口を開けてガハハと笑うときとか、してやったりとニタリと笑うときはまた別かもしれないけれど、どのみちアントンの欲しているメーシャの笑顔はそっちの顔ではないはずだ。
　笑っていればいいというものではないのだ。
　美女の笑顔が欲しいだけならば写真集でも買えばいいのだし――リベール通信社からも出している――メイベル市長の華麗なる一日写真集とか。
「さきほどのメーシャさんの笑顔は、頼み込んだわたしに対して向けてくれた笑顔なんです。アントンさんが手に入れたいって言っていたメーシャさんの笑顔も、同じようにアントンさんに向けてくれた笑顔なんじゃないでしょうか」
　だからあれは違うんです。もう一度そう繰り返した。
　アントンは言葉を無くしたように黙ってしまった。
　夕方の風がドロシーの襟足を撫でて過ぎてゆく。昼の熱を取り去って、少し肌寒くなってき

た。

立ち尽くしていたアントンが声を絞り出すようにして言う。

「僕、友人に言われたことがあるんだよね。『思っていることがあるなら、行動すればいいのに』って……」

アントンにはどうやら良い友人がいるらしい。

「今まで僕自身、グランセルでの思い出が欲しいだけだって思ってたけど……」

もうアントンはドロシーの写したメーシャの写真が欲しいとは言わなかった。

「お姉さんの言う通りかもしれない……」

顔をあげたアントンがドロシーに言う。

「けど。僕にはお姉さんみたいにうまく写真なんて」

あれ、話が捻じ曲がった。そーいう話ではないような。気まずさを隠すためかもしれないが——ということにしよう。

「これ、もうすぐ発売される予定の新型カメラなんですけど」

ちび君を見せながら、ドロシーはそれが「誰にでも綺麗に」を合言葉に作られた一般向けのカメラだと説明する。

「先ほどのメーシャさんの写真も、このカメラで撮ったものなんです。どうですか？　勇気を出して、わたしみたいに頼んでみては？」

ドロシーの言葉に、しばらく考え込んだ末、アントンは頷いてみせる。

「そう、したかったな……」

過去形だった。少し、哀しい。アントンの中でメーシャとの恋はすでに過去のものになっているのだ。

これ以上はドロシーには言えない。決めるのはアントンなのだし。彼の前途に新しい素敵な恋が待っていることを願うのみだ。

ドロシーに何度も礼を言ってから、アントンは去っていった。

しばらく背中を見送ってから、ドロシーもきびすを返す。

茜の空が東から藍色へと変わりつつあった。もう、カメラのメンテナンスも終わっている頃だろう。工房で受け取って帰らないと……。

エピローグ

カメラを引き取り、リベール通信社に戻ったドロシーを迎えてくれたのはナイアルだけだった。編集室が空っぽだったのだ。

「あれー。みなさんはどうしたんですか?」

「校了したから打ち上げに行ったぞ。編集長のおごりでな」

あっさりと言われて、ドロシーはへなへなと椅子に座りこんだ。だって、そんな話、聞いていない。
「ひーどーいーですよー」
「おまえ、今号、仕事してねえじゃん」
「はっ。確かに！」
言われてみればその通りではある。確かに今回のリベール通信には一枚の写真も載せていなかったっけ。
そういえば、クーデター騒ぎが一段落してから、取材旅行にも行ってない。
カメラのメンテナンスもしたことだし、そろそろ働かないとホントに減給どころか首になりかねない。それにしても、だ。
「そ、それはそうなのですが。わたしも一応は編集室の一員としてですねー」
「働かざるもの食うべからず」
「あーうー」
今頃はみんなして美味しいものを食べているのかと思うと、納得はできても我慢はできない。
悔しくてお腹が鳴ってしまいそう。
「あれ？　じゃあ、なんでナイアル先輩は残っているんですか？　今号、記事を載せていましたよねー？」

「おまえ、昼のこと覚えてねえのかよ。編集長、駄洒落月間だぞ」
「ああ……」
「旨いもの食いながら、あれを聞きたいか？　まあ、記事の見直しもしたかったしな」
言いながら、ナイアルは目を落としていた最新号の試し刷りを机に放り投げた。財布をポケットにねじ込みつつ、椅子の背にかけていた上着を羽織る。
「あれ？　どこかに出かけるんですか？」
「《バラル》でよけりゃ奢ってやるが、どうする？」
「へ？　ナイアルせんぱいってば、何か悪いものでも拾い食いしましたか」
「……腹が減っただけだ。いらねえなら残っててもいいぜ」
奢るなんて言葉が先輩から出ようとは。
明後日のほうを向きながら言って扉を開けて外に出ていった。
「せ、先輩！」
慌てて追いかける。
通りに出たところで待っていてくれた。
既に夜の帳が降りていて、導力灯の白い明かりが石畳に丸く落ちている。
明かりに照らされたナイアルの顔が逆光になっていて見えない。どんな顔をしているのかドロシーにはわからなかったけれど——



「いつものカレーでいいか？」
そっけなくそう言うナイアル・バーンズに、
「はい！」
ドロシー・ハイアットは笑顔を返したのだった。



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.154

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！



3名様

『も～っと集まれ！ファルコム学園』缶バッジ

大人気!! オリジナル缶バッジを5個セットで3名にプレゼント！　※絵柄はランダムです。

ご応募は特設サイトまで▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、（falmaga@field-y.co.jp）まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.154プレゼント係

1：お名前（ペンネーム可）
2：面白かった記事の番号→
　つまらなかった記事の番号→（記事一覧から1つずつ）
3：アンケート①『Falcom jdk BAND LIVE 2024』に参加してみたいと思いますか？
　アンケート②『Falcom jdk BAND LIVE』に参加したことはありますか？
4：希望するプレゼント番号
5：ご意見・ご感想など

記事一覧

1：黎の軌跡最新情報
2：も～っと集まれ！ファルコム学園
3：ファルコムニュース
4：暁の軌跡最新情報
5：英雄伝説 空の軌跡 リベール王国スナップショット

応募締め切り　12月22日（金）

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。